

第三章 研究開発の経緯と内容

A スーパーサイエンスハイスクール文化講演会 「強い心をつくる」

1 研究開発の課題（概要）

卓越した業績を残した科学者による講演会を実施して生徒の意識・意欲の向上に役立てようとするのが本事業の目的である。また近隣の中学の代表者や地域の高等学校の希望教員に参加してもらうことで、一宮高校 SSH への理解を深めることを目的としている。

本年度は、建築家・安藤 忠雄先生に講演を依頼した。ご自身の体験をもとに自立、創造性について熱く語っていただいた。

安藤 忠雄先生のプロフィール

1941年大阪生まれ。建築家。世界各国を旅した後、独学で建築を学び、1969年に安藤忠雄建築研究所を設立。環境との関わりとの中で新しい建築のあり方を提案し続けている。代表作に「光の教会」「大阪府立近つ飛鳥博物館」など。

1979年「住吉の長屋」で日本建築学会賞、93年日本芸術院賞、95年プリツカー賞、03年文化功労者、05年国際建築家連合（UIA）ゴールドメダル、10年ジョン・F・ケネディセンター芸術金賞、後藤新平賞、文化勲章、12年リチャード・ノイトラ賞など受賞。

イエール大学、コロンビア大学、ハーバード大学の客員教授を務め、1997年に東京大学教授、03年から名誉教授に。著書に「建築を語る」「連戦連敗」「建築手法」「建築家 安藤忠雄」「仕事をつくる」など。

東日本大震災復興構想会議 議長代理。この東日本大震災で親を亡くした子どもたちの学びを支援する為、「桃・柿育英会」と称した遺児育英資金を設立。被災地の子どもたちに、10年間にわたって支援を続ける。

2 研究開発の経緯

平成24年3月に安藤先生にご講演を依頼して快諾を頂いた。その後、日程や形式、生徒の事前学習の内容などについて打ち合わせて実施に至った。

事前学習としては、著書『15歳の寺子屋 国境をこえる』を生徒全員が読了。さらに、生徒から募集した運営スタッフが、「安藤先生の紹介ポスター」や「著書『15歳の寺子屋 国境をこえる』の読書案内」を作成し各クラスに掲示した。

3 仮説（ねらい、目標）

独学だけで、世界の多くの人々に認められ、いろいろな賞に輝く建築家になられた偉業の陰にどんな努力があったのか。若者に今、最も必要なものは何か。技術者として大切なことは何か。本講演を機会として、生徒がこれから何を学ぶべきなのかを考えさせていくことがねらいである。

4 研究の方法・内容

(1) 対象生徒

全校生徒1,080名、教員70名、保護者156名
一宮市内中学生 48名、同教員 19名
尾張・知多地区の高等学校の教員 6名
その他 4名

(2) 実施日時

平成24年10月30日（火）13：15～15：15

(3) 実施場所

一宮市民会館大ホール



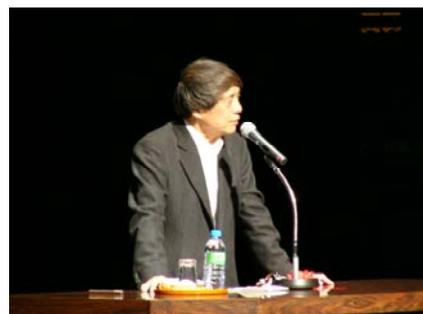
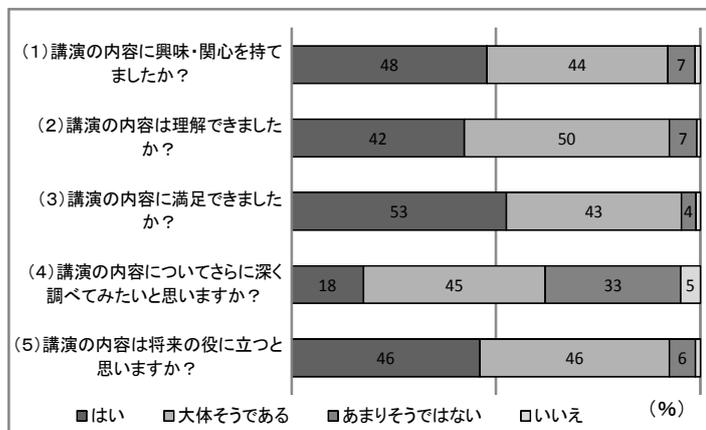
講演会の様子

(4) 実施内容

- 13:15～13:25 開会、講師紹介
13:25～14:25 ご講演（60分）
14:25～15:15 質疑応答、閉会

5 検証（成果と反省）

(1) 事後アンケート結果から



講演される安藤忠雄先生

9割以上の生徒が講演の内容を理解し、満足できたと答えた。参加された保護者にはアンケートを取っていないが、聴きに来てとてもよかったという感想が寄せられた。

(2) 生徒の感想から

- ・将来について悩んでいるときに丁度いい講演内容だったと思う。安藤先生の奇抜な発想に驚いた。自分の考えをしっかり持って、これからの人生を送りたい。
- ・私が一番心に残ったのは「感性を磨く」というところだった。特に「自分」というものをしっかり持つことが大切だということに心を打たれた。私が今まで優柔不断で頼りないのは一貫した自分が定まっていなかったからだと気付かされた。

(3) 講演会の様子から

パワーポイントを駆使した講演で、それは情熱的で奥の深いものであった。

中学時代、数学の先生に影響をうけ、同じ頃、ご自宅の改修で出会った若い大工さんにあこがれたこと。これが建築家・安藤忠雄の原点になったこと。プロボクサーとしての夢と挫折。家庭の事情により、独学で建築学のすべてを学ばざるを得なかったこと。そんな中で出会ったル・コルビュジェ作品集。これがご自身の進む方向を指し示してくれたこと。海外放浪の旅。これら先生の暗中模索の時代の話は生徒の心をうった。

また、生徒には自立・親離れのすすめを話され、保護者には子離れのすすめを説かれる等、今の日本に一番必要とされていることを強く訴えられた。

さらに、講演の間に次々と映し出される安藤先生デザインの作品はどれも美しく、聴衆に感動を与えた。

講演会後には、一部の生徒に辞退してもらわざるを得ないほど絶え間なく質問が続き、先生にはそのひとつひとつに丁寧に答えていただいた。

先生は東日本大震災で親を亡くした子どもたちの学びを支援するため、「桃・柿育英会」と称した遺児育英資金を設立されている。そこで、少しでも震災復興の役に立つようと、講演の前後30分ほどの時間を利用して著書販売とサイン会を実施した。また同時に「桃・柿育英会」の募金箱も置いた。



サイン会の様子